

国衙所在地諸説

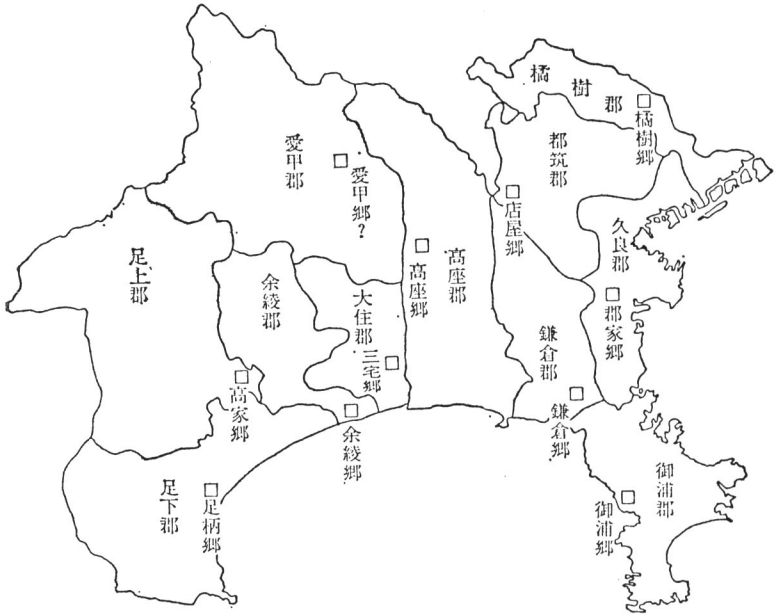
えられたが、最も重要なのは天皇直轄の人民と  
 国造・伴造とものみやつこ（部の首かびら）の支配する人民の戸籍を  
 作り、田畑を調査することと、空地に武器庫を  
 造って、地方にある刀甲弓矢を集めて収納する  
 ことであった。

この八人の国司が任命された東国の国々の範  
 囲については異説はあるが、相武が含まれてい  
 ることは疑いなく、国司の派遣は東国に多くの  
 天皇家の部民が設定されていたことと深い関係  
 があるろう。そして翌大化二年（六四六）正月、政  
 治の大革新を行うことを天下に告げる改新の詔  
 が宣布された。その詔は、四か条から成ってい  
 た。第一条は、天皇をはじめ国造・伴造らの所  
 有する私地・私民の廃止、第二条は、全国に国  
 ・郡・里の行政区の制定、第三条は、戸籍を作

り、班田収授の実施、田租の統一、第四条は、人民の調・庸等の制定である。これまでの国造の人民支配を否定し、国郡制と天皇の任命する官人による支配体制を実施することが打ち出されたのである。この新体制は、大宝元年（七〇一）にできた大宝律令で法文化が完成した。今日の神奈川県のもととなった相模国と武蔵国も、後に郡の新設（近世中ころに設けられた津久井県）や、隣国の郡の移管（近世の初め、下総国の葛飾郡を武蔵国に編入）があるまでは、その境域は、大化改新後、間もない時期に定められた。その後、国や郡の新設や廃合がしばしば行われ、全国が六十八の国と定つたのは、平安時代の初め弘仁十四年（八三三）のことである。

こうして新体制に再編された県下で、まず武蔵国に属する地域は、以前、武蔵国造が献上した屯倉が郡となつた橘樹郡・久良郡と都筑郡の三郡、相模国では、足上郡・余綾郡・足下郡・大住郡・愛甲郡・高座郡・鎌倉郡・御浦郡の八郡である。この八郡は、小田原北条氏の時代に、足上郡・足下郡を西郡、余綾・大住・愛甲三郡を中郡としたことはあつたが、一八七八（明治十二）年の新郡区編制に引きつがれた。

国には国司、郡には郡司の政庁がおかれ、国衙・郡衙とよばれ、その所在地がそれぞれ国府・郡家である。武蔵国府は、東京都下にあるが、相模国府は、数か度の変遷があり、十世紀にできた「和名抄」は、国府は大住郡に在りとあり、十二世紀の書には、余綾に府ありとある。また、奈良時代全国の国ごとに建立された国分寺の址が今日の海老名市にあるところから、海老名国府説もある。最近綾瀬市から、天平初年ここが国府であることが裏付ける木簡が発見されて、最初の相模国府がこの地であることが明らかになった。「和名抄」にみえる大住



相模国八郡と武蔵国三郡の郡衙所在地（推定）

郡国府については、伊勢原市比々多説、平塚市四ノ宮説、秦野市御門説等の諸説があるが、四ノ宮説が有力である。余綾国府は、大磯町大字国府本郷の地で、国府津は、その外港であり、大住郡からここに移ったのは、平安時代末期とする説がほぼ定説である。

このほか、小田原市永塚千代廃寺付近に国府があったとする足柄国府説も提唱されている。

これほど国府所在地の候補地が多い国は他にない。これは相模国の歴史を考える上で重要な問題である。

**白村江の敗戦と防人** 大化改新が発足して数年のちの西暦六六三年、ヤマト朝廷が、百濟復興のため

朝鮮半島に送った軍隊が、白村江で、唐と新羅の連合軍のため大敗した。

今日、中国東北地区輯安にある高勾麗国王広開土王（三九一年即位―四一二年没）の死後二年目に建てられ



防人の歌碑 福岡県

た碑文に、辛卯しんぼうの年（三九一）倭兵が海を渡って百済に侵入し、三九六年には広開土王が百済に侵入した。三九九年、倭兵が新羅にせまり、四〇四年倭軍は漢江を渡って、平壤にせまった。広開土王はこれを迎えうって殲滅せんめつ的打撃を与えたとある。四世紀末五世紀初めに、倭の大規模な半島進出があったことは疑うべくもない。

しかし、半島諸民族の民族的自覚による反撃によって、ヤマト王権の半島経営は次第に困難となり、五六二年には、ヤマト王権の前線基地の役割を果たしていた任那みまなが新羅に亡ぼされ、六六〇年には、盟邦百済が、唐・新羅連合軍に亡ぼされた。その復興のため、斉明天皇さいめいはみずから九州に下って、救援の大軍を送った。援軍は、前・中・後の三軍に分かれ、前軍將軍は上毛野君稚子かみけのきみわくこ、中軍將軍は巨勢神前臣こせのかむさきのおみ詠語・三輪君根麻呂みわのきまろ、後軍の將軍は阿倍引田臣比羅夫あべのひきたのおみひらふ・大宅臣鎌柄おみやけのおかまら、兵は二万七千の大軍である。三軍は、その將軍からみて前軍は東国兵、中軍はヤマト及びそれ以西の西国兵、後軍は北陸筋の水軍とみられる。まず前軍は、新羅を攻めてその二城を攻略し

て百済に転進したが、唐軍と結んだ新羅軍は、わが前軍にかまわず直接百済の王城に進攻した。唐軍が新羅より先に百済の王城を攻略しようとしたからである。百済王城の危急をみたヤマトの中軍は、百済王城に直行し、白村江で唐の水軍を迎えうたれて、壊滅的大敗をうけた。前軍はこの戦に間に合わず、水軍を主とした後軍は、白村江の敗残兵と百済の亡命者を收容して本土に撤退した。東国兵から成る前軍は、この撤退作戦の後衛をつとめつつ順次に引きあげた。これでヤマト軍は半島から姿を消すのである。

白村江で大勝した唐将劉仁軌は、引きつづいて高句麗討滅作戦に忙しく、新羅もまた半島統一の目的のため、半島における唐の行動を牽制する必要があつて、倭軍を追尾する余裕はなかつた。しかし、徹底的打撃をうけたわが国は、そうした情勢を知る由もなく、一刻も早く国防態勢をととのえる必要があつた。仮りに知っていたとしても、国防整備は緊急事であつた。敗戦の翌年対馬・壹岐・筑紫等に防人と烽を置き、筑紫に水城を築いた。半島撤退作戦に後衛に当たつた東国軍は、臨戦態勢をとつたまま駐屯した。これが、防人の起源である。その総勢は、三千人、年々一千人ずつが交替した。この臨戦態勢は、防人の廃止される九世紀まで解除されなかつた。動員される防人は、相模・武蔵をはじめ、遠江・駿河・伊豆（以上静岡県）・甲斐（山梨県）・安房・上総・下総（以上千葉県）・常陸（茨城県）・信濃（長野県）・上野（群馬県）・下野（栃木県）の国々の兵士でそれぞれの国司が自国の兵士の中から選抜し、その国の国司が引率して、摂津の難波（大阪市）に集結する。ここで征討軍出征に限って天皇から派遣された特使の慰問をうけ、大宰府の官人に引きわたされる。難波は防人出陣の港である。

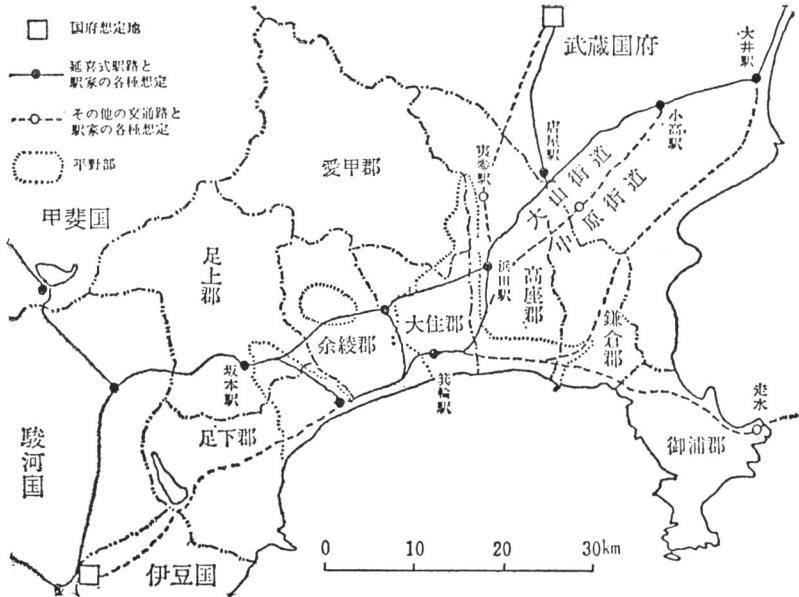
防人は、未婚の青年が多く、道中、父母をしのぶ歌を多くのこした。勿論、既婚の青年もいた。彼らの妻は、足柄山を越える夫をしのんで、別離の歌を歌った。足柄峠（南足柄市）は、相模の女性の夫しのびの峠となった。

### (三) 律令制下の相武

#### 中央支配の体制

大化改新で古代の地方の時代は終わって、新しい中央支配の時代が始まった。

新制度では、すべて中央が地方支配を完全に行うようにくみだてられた。地方にはすでに数百年の歴史をもつ農村が、住民の共同体としてでき上っていたが、それは五十戸を単位とした里（のち郷）に再編成された。この戸は、家族を基準とはしたが、一里五十戸制に合わせるため、数個の家族をあわせて一戸とする場合が多かった。従って戸籍に登録されている戸が、一つの家に生活していたとも限らない。こうした戸を創り出したのも、中央が農村から調庸をとり立て、兵士を徴発するのに便宜を考えた上でのことである。里の長は、その里に住む有力者で、容赦のない徴税を行った。郡は、大化前代の国造の国を郡とした場合が多く、その行政官として、前代の国造家の者を天皇が郡司に任命した。郡司の主要な役目も、徴税であった。承和七年（八四〇）大住郡の大領（郡の長官）壬生広主が、困窮した農民に代わってその分の調庸を私稲で代納し、戸口五千三百五十人を増加したとして賞せられ、翌年には高座郡の大領壬生黒成が、貧民に代わって調庸税を代納し、飢民



相模国交通図 木下良『相模国府の所在について』から

には私稻を与えて救済したので、戸口三千百八十人を増加したとして賞せられた。数千の人口が突如として出現するわけではないのに戸口が増加したと称して褒賞することは、中央の地方支配の意図を示している。

国には、中央の貴族が国司として任命され、四年（時には六年）の任期で赴任し、行政・警察・裁判の三権を握り、国の最高責任者として地方行政を行った。前代地方の首長であった国造は、祭祀者としてその存続がみとめられたが、一国一国造に統合された。相模国では、日本武尊に仕えたと伝承をもつ漆部氏が、神護景雲二年（七六八）に、相模宿禰の姓を賜って、相模国造に任じられている。

**中央に集中する官道** 大化改新以前には、農民は、現地の首長の一部をヤマト大王に、御贄として、納めていた。大化

改新では、これもすべて天皇のものとし、天皇から首長らに給与することに改めた。物資を天皇のもとに集中するため、道路が整備された。中央の支配力を地方に浸透させるためにも必要であったからである。ミヤコを起点として、東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道が完成したのは、大宝令が完成したところである。各道は、お互いに交錯せずに各国の国府を連絡し、本道を外れた国府には、支線がのびる。武蔵国府は、はじめ上野国からのびる支線で東山道に結ばれたが、宝龜二年（七七二）に、相模国府に結ぶ東海道につけかえられた。相模国府は、初めから足柄峠を越えて、南関東を走る東海道に属した。この道は、鎌倉郡・御浦郡を経て三浦水道を渡って安房国府に至り、北上して上総・下総を経て、常陸を終点とした。この古い東海道は、古代上毛野氏の勢力が武蔵にも及んで、ヤマトの大王の力が、それを避けざるを得なかつた古代東国の情勢を反映したものと考えられる。この国府を連結する官道の、ほぼ三十里（二二〇キロメートル）ごとに駅を設け、駅戸・駅馬を常置して、公用の往来に供した。相模国内には、坂本駅（足柄上郡）・小總駅（余綾郡）・箕輪駅（大住郡、一説に余綾郡）・浜田駅（高座郡か、海老名市、あるいは厚木市内とする説もある）、県下の武蔵国内には店屋駅（町田市付近か）・小高駅（川崎市）があり、小高駅からさらに大井駅（東京都）に連なつて、下総国（千葉県市川市）に至つた。

### 相模の古代物産

八世紀から九世紀にかけての、県域の総人口を、ある数学者は十三万二千四百四十人と算出した。また水田の面積は、一万二千九百二十町歩（約一万二千八百十ヘクタール）と推計した。

この水田の面積は、現在ほど県下の住宅化が進行していない昭和四十年（一九六五）の水田面積の一万四千二百





足柄峠 南足柄市から御殿場市へ通じる

五十一ヘクタールに比べれば、約九〇割になる。古代県域の産業としては、水田農業が第一位を占めたことは間違いない。  
なご。

近世では相模国の代表的な物産になった麦は、奈良時代以来、政府の栽培奨励が行われたが、農村ではなかなか麦になじまず、折角栽培しても、青麦のうちに馬に食わせる有様であった。「万葉集」の東歌にも「柵越しに麦食む子馬のはつはつに相見し子らしあやに愛しも」という歌がある。農村に麦栽培が普及し、日本人の食料となるのは、平安時代も後期からのことである。

古代相模の農産物の特産物に橘たちばなのみ子がある。橘はミカンの古名といわれ、本来は南方の産物であるが、その渡来が伝説として田道問守たちまもりの話が日本書紀にあるから、由来は古い。今日でも柑橘類の分布は、武蔵国の南部が北限とされているが、相武の地は国造時代から、橘子の特産物として

て、ヤマト朝廷に献納しており、武蔵国橘花屯倉たちばなのみやけの名も、日本武尊の妃弟橘媛たちばなひめの名も、橘樹郡たちばなの郡名も、この地の橘子が、ヤマト朝廷に強く印象づけられていた証拠である。

また相武台地や西部山岳地帯は、いろいろな薬草の産地でもあった。中央に運ばれて、官人たちの薬用に供せられた薬草は、相模国三十一種、武蔵国二十八種に及んでいる。薬草の一種として、染料の紫草むらさきも、相模・武蔵の有名な物産であった。また足柄山は、良材の産地としても知られた。「万葉集」には、足柄山の材でつくった船は、船脚ふなあしが早いことをたたえたいくつかの歌があり、足柄峠の名も、この材でつくった船の脚が早いという意味（足輕）であるという説が、平安時代の末に唱えられていたほどである。この相模国の材木は、近世の江戸の城づくり、町づくりにも用いられた。

同じように、古代から近世にかけての相模国の特産に石材がある。江戸築城の石材に、根府川石が大いに用いられたことは有名であるが、和銅六年（七二三）に、中央政府が、諸国の調物の調整を行ったとき、大倭やまと（大和）・三河みかわは雲母、伊勢は水銀、相模は石硫黄いらいおう・白燐石しろのぼんしやく・黄燐石、美濃は青燐石、信濃は石硫黄、上野は白石英・雲母・石硫黄を献納させると定めた。燐石は、堅くて大きな石をいうが、白・黄・青などの美しい色をもった石材を、相模や上野から、どうして都に運ぼうとしたのであろうか。和銅三年（七一〇）に平城京に都が移り、宮城も市街も造営の最中である。その建築材料にもしようとしたのであろうか。いづれにしても、相模の石材が注目される物産であったことを示している。石硫黄は岩状硫黄で、相模の石硫黄は箱根山産、上野のは白根山産であ

ろう。これは典葉寮てんやせうの葉材とされた。これらの硫黄は、現代になり石油化学の副産物としての硫黄が出現するまで採掘がつづけられた。

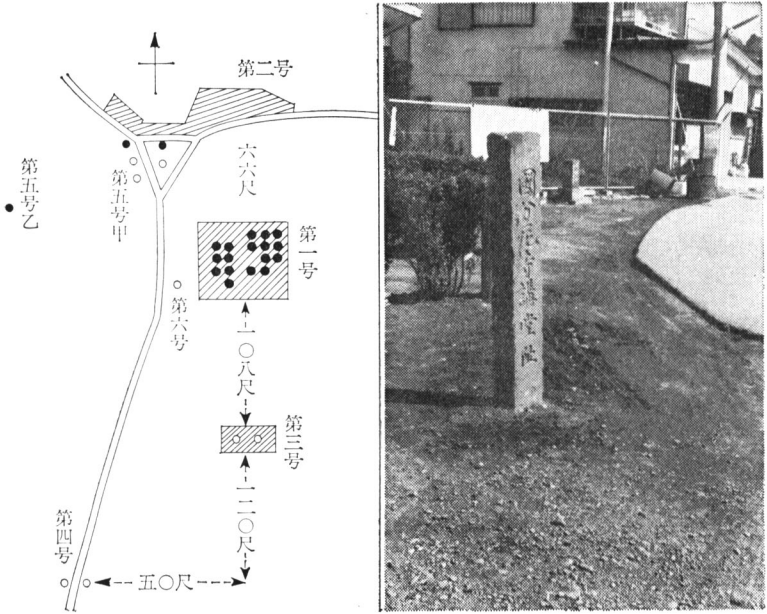
相武の古代物産のうち、日本の歴史の流れにも大きい役割を荷つたものに、牧畜がある。牧畜にも馬と牛があるが、相模・武蔵で飼育されたのは馬である。相武の牧場経営も、はるか大化前代にさかのぼり、弟橘媛はしりみづが走水の海に身を投ずるときに歌つたという「さねさし相武さむの小野に燃ゆる火の、火中ひなかに立ちて問ひし君はも」というのも、相武台地に展開する牧草燃やきの歌である。東国の馬は、大化前代から、良馬としてヤマト朝廷の貴族たちの欲するものであった。「万葉集」にも、相武の馬飼いの歌がある。武蔵国豊島郡としまの防人椋椅部くらはしべの荒虫あらむしの妻宇遅うじ部黒女くろめの「赤駒あかこまを山野に放し捕りかてに多摩たまの横山よこやま徒歩あしゆか遣らむ」の歌には、相武台地に放牧された馬と、平安末にもなれば、武蔵七党の一つとして活躍する横山党の源流をみることができるといえる。

大宝律令の制度では、全国と中央とを連絡するために設けた官道の駅に常備する駅馬や、各国に設けた軍団ぐんだん（相模国には、大住軍団と餘綾軍団よらやが設けられた）の兵馬をみたすため、国営の牧まきを設けたが、九世紀になると、兵部省が管轄する官牧かんぼくが整備された。この官牧は馬牧と牛牧があつて、東国と西国の十八国に五十一牧で東国では相模国高野馬牛牧たかのと武蔵国檜前牧ひのくま・神崎牧かみさきがある。これらの牧の現在地を求めることは困難であるが、十世紀になると、官牧の外に、御牧みまきが設定された。御牧はすべて馬牧で、勅旨ちよくしによつて設定されたので勅旨牧ともいう。勅旨牧は、甲斐・武蔵・信濃・上野の四か国で三十一牧を数える。相模国内には見当たらないが、武蔵国の石川牧・

小川牧・由比牧・立野牧の四牧があり、石川牧は横浜市緑区石川、小川牧は東京都秋川市小川、由比牧は八王子市、立野牧は横浜市緑区本郷に比定する説がある。すべて多摩丘陵地帯であり、そのうち二牧が県域になる。勅旨牧の馬は、毎年九月十日に牧監（牧場長）が、牧場に赴いて馬に焼印を押して報告書を作り、四歳以上の駒を選んで調練をし、翌年八月に牧監らが率いて上京するが、朝廷から駒迎使を差し向かわせ、いよいよ入京すると、天皇は紫宸殿に出て、貢馬を閲覧し、一部を諸臣に頒賜する。これを駒牽とよんで、天皇の権威を示す平安時代の重要な宮廷年中行事となっていた。しかしこの駒牽も、十一世紀末平忠常の乱以後途絶える。代わって、相模守が個人的に貢進した。これは、相模国の馬牧が衰えたのではなく、官牧・勅旨牧の経営が、公的なものから私的なものへと変化したにすぎない。官道の馭馬や軍団の兵馬は、その制度の衰退によって需要はなくなつたが、中央・民間の牛馬の需要はかえって増大し、そのため有力貴族は、その所領荘園に牧を加えていったほどである。はるか古代から良馬を産していた相武は、馬の飼育・繁殖・訓練にすぐれた牧飼の伝統がある。この伝統の上に中世の武士が成長したのである。

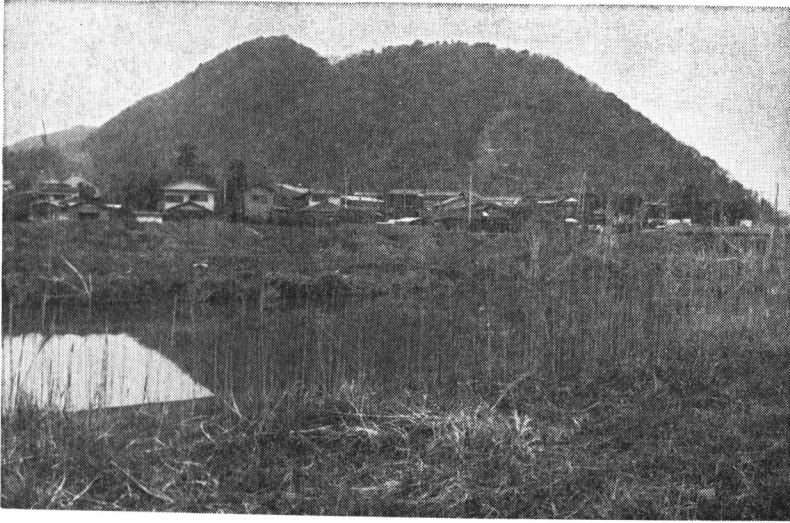
### 文化の伝播

律令体制は、西方から浸透したが、それは同時に西方文化の浸透でもあった。それは、仏教、帰建てられた法隆寺や大安寺や、奈良時代の東大寺の所領が、相模国にも設定されたことに始まる。また天武天皇のときから始まった全国の国庁でのいろいろな仏教行事も、相模の国府で行われたであろう。この国府での仏教



相模国分尼寺遺跡図 「相模国分寺誌」から国分尼寺講堂址

行事は、やがて天平十三年（七四一）の国分寺・国分尼寺の建立へと発展する。相模国分寺・国分尼寺については、今日の海老名市国分にある国分寺であるとの説が定説となっている。金堂・講堂・東西廻廊・塔・僧坊・中門・築地などの痕跡が復原され、その寺域は四町歩（四ヘク）を下らず、寺域から復原した塔は十六丈（約四十八メートル）に及ぶ壮大なものであったと推定されている。東京都国分寺市にある武蔵国分寺址からは、都筑・橘・久良などの郡名、大井・高田・諸岡などの郷名、更には戸主名などを印したおびただしい瓦片が出土し、武蔵国内の郡・郷・戸主の総力を結集したことがうかがわれるのに、相模国分寺には、文字を印した瓦は一片も発見されない。これは相模の場合は恐らく大住郡の大領で富裕であった壬生氏の氏寺を転用したからではなからうか。いずれにしても国分寺は以後、



高麗山 大磯町

各国の華<sup>はな</sup>として文化の中心的役割を果たすことになる。東大寺の初代別当良弁<sup>らうへん</sup>や、第一代の天台座主<sup>ざいす</sup>(延暦寺の長官)義真<sup>ぎしん</sup>が、相模国の出身者であることも、また平安時代の仏像が、意外にも、仏教文化の伝播のひろさをうかがわせる。

第二の帰化人によるルートの痕跡は、大磯町高麗山<sup>こま</sup>の周辺に濃厚にみられる。国史「続日本紀<sup>しよくにほんぎ</sup>」に霊龜二年(七一六)駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野七国の高麗人千七百九十九人を武蔵国に移して高麗郡<sup>こま</sup>を設けたとある。この中の相模国の高麗人の入国の年時は不明であるが、彼らは、平塚市・大磯町のあたりに上陸したらしい。高麗山に高麗寺<sup>こらいじ</sup>を建立し、その習俗を国府<sup>こふ</sup>の祭<sup>まつり</sup>にのこした。高麗寺は、鎌倉時代には、源頼朝が妻北条政子の安産祈禱<sup>やすんきとら</sup>を命じた相模国内十五か寺に加えられた。第三のルートは、来任した中央官人である。東国が蝦夷<sup>えみせ</sup>地経営の兵站基地<sup>へいたん</sup>の一国であったことから、中央の任命する国司は、武官系が多かった。万葉歌人大伴家持<sup>おほとものやかもち</sup>も宝龜五年(七七

四)に相模守に任ぜられた。彼は兵部少輔ひょうぶしょうぶのとき、難波津で東国防人を点検して、貴重な防人の歌を採録した。万葉集には、東歌あづまうたが多い。これは彼が相模守の任中に採訪したものではあるまいか。

家持の採録した相模国防人の歌は数首にすぎないけれども、これによって素朴な相模農民の歌心のたかまりを、現代のわれわれに伝えるのである。彼自身相模での歌は残さなかったが、古代東国の文化的恩人である。

蝦夷地が鎮静する平安時代も中ごろになると文人的な国司の任命も多くなる。その一人に伊勢物語の作者といわれる在原業平あはらのなりひらがいる。彼は元慶二年(八七八)相模権守に任ぜられたときは、右近衛権中将であった。やはり武官である。彼と同行して下向した彼の二男滋春しげはるは、小総すけ駅や箕輪駅で歌を詠んだ。「伊勢物語」の話の数々も、業平在任中の行状の反映であろう。また、父の菅原孝標すがわらたかすえが下総守の任期が終えた時、共に帰京する十三歳の少女が、多摩丘陵を横切り、足柄峠を越える旅路の思い出は、晩年の「さらしな日記」にかきとめられて、文学史上にも有名である。それから数年後、源頼光の女で、歌人として円熟した乙侍おとしじゆう従は、相模守に任命された夫大江公資きんすけと同行して相模国府に四年の任期間をすごし、さがみと号した。彼女の歌集「相模集」は、相模国での歌が大部分を占める。とくに下向三年目の正月、箱根山に参詣さんげいし、たむけの幣ぬきを草紙にして、百首和歌を書きつめ、社の下に埋めたが、やがて箱根山の僧から、箱根権現の百首の返歌をおくられた。平安末、京都で流行した百首歌詠が、この地にも芽ばえようとしたが、翌年夫の任期が満ちて共に帰京したので、歌壇形成に至らなかった。中央官人による文化伝播が、現地に根付くことの困難さを示している。

## 三 中世の夜明け

### (一) 倭馬と騎馬の風土

#### 倭馬の党

昌泰二年（八九九）上野国から中央に対して、東国に強盗が蜂起して、被害甚大であるとして、その対策を求めた。その言によれば、この強盗のもとをたどってみると皆、倭馬の党の連中である。

近頃、坂東諸国の富豪の輩が駄馬（荷物<sup>だば</sup>を背にのせて運ぶ馬）で物を運んで稼いでいるが、その駄馬は百姓の馬を掠奪したものである。しかも東山道の駄馬を奪つては、犯跡をくらますために東海道で使い、東海道の駄馬を掠奪して東山道で使っている。そのため一疋の駄馬を奪うために百姓を殺すことも辞さない。あげくの果て、群党と結んで強盗となったものである。そこで当国は隣国と協力して追討すると、彼らは解党して、碓氷・足柄峠から脱出してしまふ。すでに碓氷峠の坂本（群馬県）に遠羅（見廻り）を置いて通過する者を調べて、相模国に移送しているが、地方の一国の処置だけでは弱いので、中央政府のはからいとして、碓氷峠と足柄峠に関をおいて、通行手形を点検して通行させるようにしたい、というのである。東国の農民に新しい掠奪者があらわれたのである。しかもそれは富豪の輩である。





駄馬 「石山寺縁起」から

駄馬は雇い馬のことで、後に馬借ばせやくとよばれたものである。平安末期には、美食美酒に目のない美女が、それを満足させるためにその夫にえらぶ男性が馬借であるといわれるほど、その稼かせぎは荒かった。駄馬は背に荷物を負わせるのであるから力が強ければよい。速さは問題でないので、百姓の耕馬がねらわれたのである。後に軍事的要所となる碓氷・足柄峠の関は、ここに始まった。数年後に、相模国から関設置の効果があつたことが報告されたが、通行手形は一層強化されなければならなかった。

### 内乱と相武

天慶二年(九三九)に北関東で起こった平将門たいらのまさかどの乱は、古代国家をゆりうごかした最初の内乱で

あるばかりでなく、これまで西日本の政権に駆使されて来た東日本の人々が、西日本から自立する最初の烽起であった。平将門自身は桓武天皇五世の孫で、祖父高望王たかもろちが、平姓を賜つて上東国に土着した高望の子は、上総・下総・常陸等に田地を開いて領主となり、その子孫は、関東八平氏となったが、将門は、下総の北部猿島郡さしまを中心に所領を開発した父良持よしもち

総介まのすけに任ぜられて東国に土着して三代目である。

て領主となり、その子孫は、関東八平氏となったが、将門は、下総の北部猿島郡を中心に所領を開発した父良持



将門塚 東京都千代田区

の死後、同族間と所領をめぐって紛争をおこし合戦に及んだ。将門は常に優勢であった。勢に乗じて、同族外の紛争にも乗り出したことから、ついに常陸国府を攻略する破目となり、つづいて下野国府、上野国府をも占拠、

天皇の任命する国守を放逐し、ついに上野国府で、自ら新皇と宣言し、本拠猿島郡に都を計画し、坂東八か国と伊豆国の国守と百官を任命した。相模守には、弟将文<sup>まさふみ</sup>を任命した。このころ相模国府は大住郡にあり、将門はこの国府も巡検した。この将門反乱の報は、京都の貴族たちを驚かせたが、将門自身は、王国建設の翌年二月十四日、同族平貞盛<sup>さだもり</sup>と下野の豪族藤原秀郷<sup>ふじわらのひでさと</sup>の連合軍に破れて敗死する。

京都では征夷大將軍藤原忠文<sup>ただふみ</sup>らを征討使として出発させたが、その到着以前のことである。乱の平定も、東国の人々によったのである。またこの乱での主要な戦鬪は騎馬戦である。同じころ西国では藤原純友<sup>すみとも</sup>の反乱がおこっていた。この乱は専ら船による反乱であった。東の騎馬は、古代蝦夷戦<sup>えぞ</sup>できたえられ、東国での牧飼の伝統の上に養われたものである。

東国はこの乱で、西国支配からの離脱第一歩を示したのである。

将門敗死の後に東国に入った征討軍は、残党の掃討を行い、相模国では、将門の兄将俊、将門に常陸介に任ぜられた藤原玄茂を討ちとつた。

### 平忠常の

将門の乱からおよそ九十年、都で栄華を誇った藤原道長が死んだ翌年、長元元年（一〇二八）房総の乱と相武地（千葉県）で平忠常の乱が起こった。朝廷は、檢非違使平直方と中原成道が追討使として現地に派

遣したが、三年たつても鎮定できず、現地の荒廢は、将門の乱以上であつた。結局、朝廷が、源頼信に交代させると、忠常は戦わずして頼信のもとに出頭して降参し、乱はあつけなく終結した。平直方は、鎮定には失敗したが、坂東に滞在在中に、鎌倉に館をつくり、鎌倉幕府をきざいた北条氏の祖を東国にのこした。その上、頼信の子頼義の武勇に感じ、婿に迎えて鎌倉館をゆずつた。直方の娘と頼義の間に、八幡太郎義家・義綱・義光の三子が生まれ、源氏の世を出現することとなる。

頼信に従つて忠常の乱に東下した頼義が、長暦元年（一〇三七）相模守となつて再び東国に下向すると、人民は彼に帰服し、拒捍の類（納税拒否者）は、あけて奴僕のように奉仕し、会坂（近江、これより東国）以東の弓馬の士の大半は、頼義の門客となつた。陸奥の地に前九年の役が起こると、陸奥守となつた頼義は、国衙の兵と門客となつた東国の士を組織して転戦した。敵方の現地の土豪安倍氏の一族の団結は固く、前後十二年にわたる苛烈な戦闘をくり返した。天喜四年（一〇五六）十一月の黄海（岩手県東磐井郡藤沢町）の戦で大敗した頼義は、一時は戦死と思われた。この時、辛くも敵の包围を脱出した佐伯経範は、「自分は將軍に仕えて三十年、將軍に地下ま